

第4節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

1. 保育所新営その他工事に伴う予備発掘調査

調査地区 小串構内保育所南西側駐車場敷地

調査面積 50㎡

調査期間 平成27年5月13日～6月6日

調査担当 横山成己 山田圭子

調査結果

(1) 調査の経緯(図58、写真107・108)

小串構内北部、体育館北側敷地において、保育所の建て替え工事が計画された。山口大学医学部構内遺跡は、北方ほど堆積層中の遺物の密度が高く、南方へ移行するに従い遺物の密度が低くなる傾向にあるが、構内北部北東側は現在まで駐車場としての土地活用が続いてきたため、地下の様相は不明確であった。

そのような状況下で平成22年度に実施した地域医療教育研修センター新営に伴う予備発掘調査では、近世客土下に主として古墳時代から古代にかけての遺物が密に含まれる河川堆積層が存在することが明らかとなった。^{註1} 元来、堆積層に含まれる遺物の由来地として構内北西部の丘陵を想定していたが、この調査区は構内南東横を南流する真締川に隣接することから、当地周辺においては、丘陵からの遺物流入のほかに、河川による遺物流入を想定する必要が生じることとなった。

開発予定地は、体育館北側の約1,000㎡であり、丘陵地と真締川のほぼ中間地点に当たる。丘陵付近の堆積層と真締川付近の堆積層の関係を明らかにするため、北西－南東方向へ長くトレンチを設けることを模索したが、慢性的な駐車場不足から駐車場をできる限り閉鎖したくないという医学部の要求を最大限に考慮し、調査面積を5m×12mとし、仮設現場事務所、残土置き場を含め最小限の駐車場封鎖で調査を実施することとなった。

【註】

1) 横山成己(2014)「医学部地域医療教育研修センター新営工



図58 調査区位置図



写真107 調査地点遠景(北上空から)



写真108 調査地点近景(北から)

事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成22年度—』, 山口

(2) 調査の経過(写真109～111)

調査は平成27年5月13日に着手し、翌14日に重機掘削を終了した。15日以降は旧耕土(第1層)(写真109)、旧客土(第2層)の上面検出および掘削を行い、21日に自然堆積層である第3層上面を検出した(写真110)。以降、第3層から第5層まで掘削を進め、6月2日には予定通り海拔0m付近までの掘削を完了した。3日以降は断面精査および諸記録作成を実施する予定であったが、想定より早い梅雨入りにより、翌3日には調査区壁面が大きく崩落した(写真111)。崩落は調査区南西側花壇の下に達しており、現場復旧は困難であること、また隣接する駐車場ゲートも安全面から封鎖せざるをえない状況であることから、急遽調査区東側約2/3を埋め戻し、翌4日に平板測量および調査区壁面遺存部の断面実測を試みたが、精査中にさらに壁面の崩落が進行したため、柱状図の作成に止め、調査の続行を断念し、調査区全域を埋め戻すこととなった。雨天作業中止をはさみ、6日には調査区の埋め戻しを完了した。

(3) 基本層序(図59、写真112)

今回の調査では、現地地表下約0.8mまでの造成土を重機により掘削した。造成土以下は人力による掘削となったが、最終的に現地地表下2.5m付近までの掘削となることから、安全確保のため壁面に沿い0.8mの平坦部を設け段掘りを行った。造成土下位に確認した堆積層は5層に区分される。

第1層は構内造成前の旧耕土(褐灰色弱粘質土)で、層厚約0.08m。近世および近代の遺物を包含する。第2層は江戸時代後期(18世紀末)に耕地化のため置かれた客土と推定される。層厚0.3mの青灰色粘土であり、水田床土として利用されたため上部は土壌化してにぶい黄色を呈している。主として近世の遺物を包含するが、既往の調査では中世の瓦質土器および古墳時代の須恵器も混ざる。第3層は層厚0.2mの青灰色粘土と灰白色砂の互層。第4層は層厚0.7mのオリーブ黒色粘性細砂で、扇形の青灰色砂が多く混ざる。二枚貝の痕跡と見られる。第5層は灰色強粘質土で、第4層同様扇形の青灰色砂が見られるが、その量は少ない。既往の調査では、第4・5層より縄文土器や石錘、弥生土器甕、古墳時代のもものと見られる土師器甕体部片が出土している。

(4) 遺物(図60、写真113、表10)

遺物が見られたのは第1層および第2—1層のみで、第3層以下からは出土していない。

図示可能な遺物はいずれも陶器である。**1・2**は陶胎染付の底部片。**3・4**は鉢の口縁部片。**5**は粗陶器甕の口縁部片。**6・7**は播鉢口縁部片で、**6**は肥前系、**7**は須佐唐津と見られる。

(5) 小結

小串構内は、真締川右岸に立地している。真締川は、現在南に直進し河口に至っているが、江戸時代には小串構内南端部(樋ノ口橋)で西折し、JR居能駅付近を河口としていた。そのため、本川(真締川)が上流から運んだ土砂が河口を埋め、洪水被害に見舞われることが度々であったことが記録として残されている。18世紀末の寛政11年(1799)には本川河口の付け替え工事が藩に申請され、河口を樋ノ口橋から南方に直線的に付け替えた(新川)ことにより、川の流れが改善され、耕地化が進んだことが近世文書「船木宰判本控」に記されている^{註1}。

当調査でも確認された旧耕土下の第2層は、耕地化に伴う客土と見られ、既往の調査では主として中

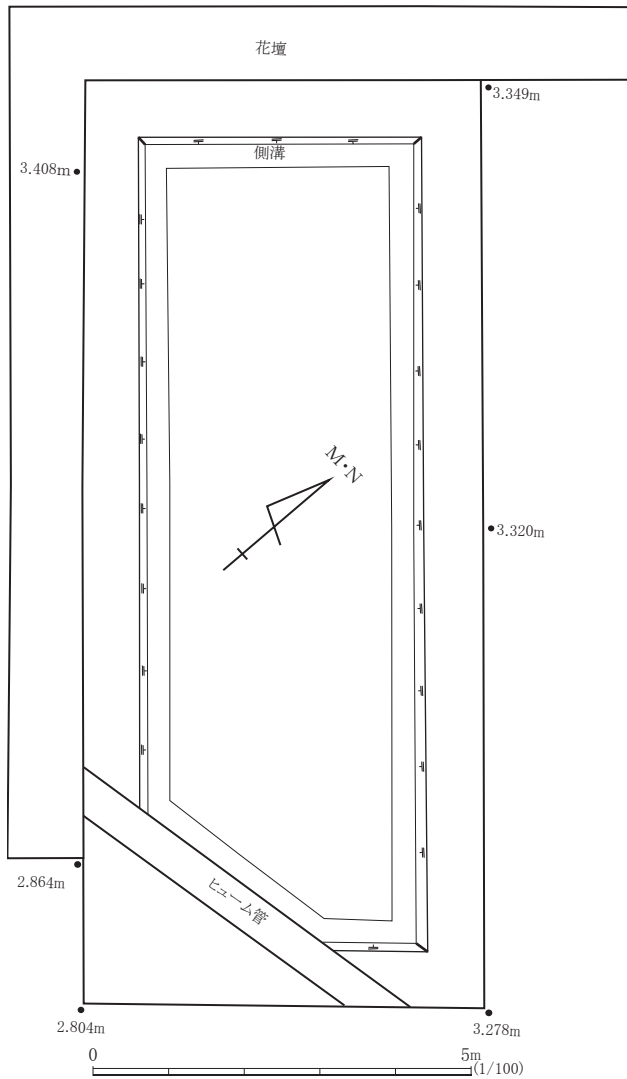


写真109 第1層上面検出状況(南東から)



写真110 第3層上面検出状況(南東から)



写真111 調査区崩落状況(東から)

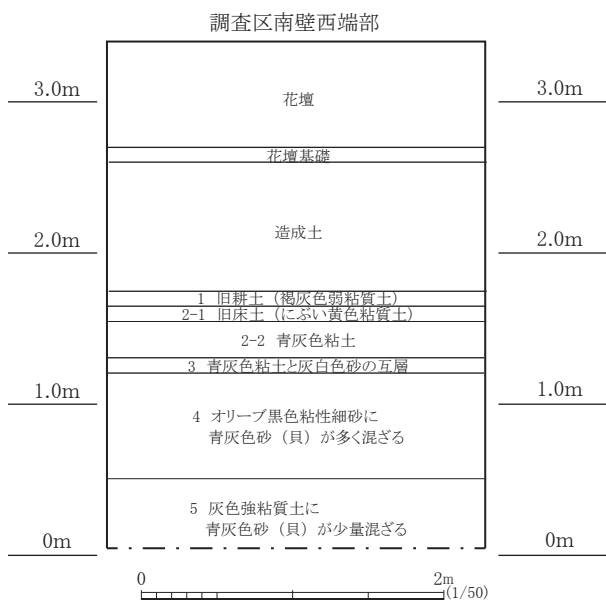


図59 調査区平面図・断面柱状図

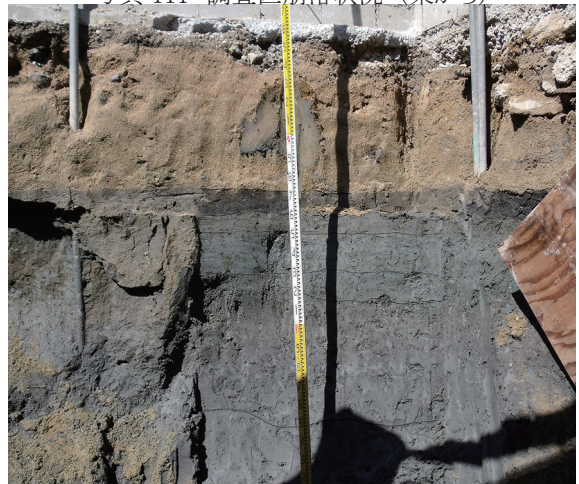


写真112 調査区南壁西端部土層断面(北東から)

小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

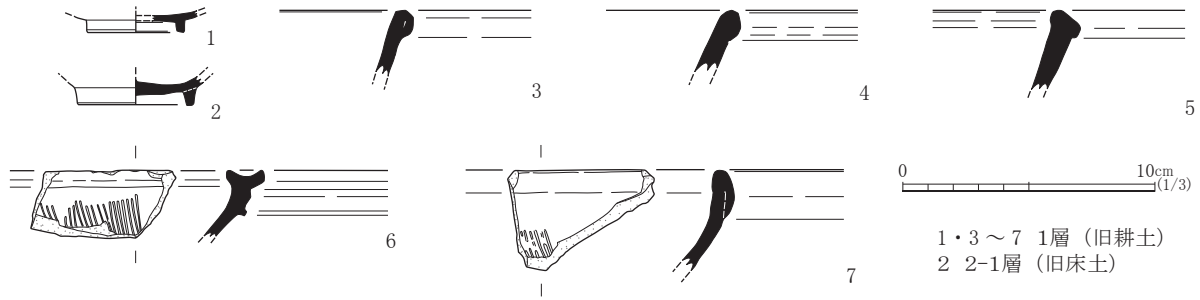


図 60 出土土器実測図

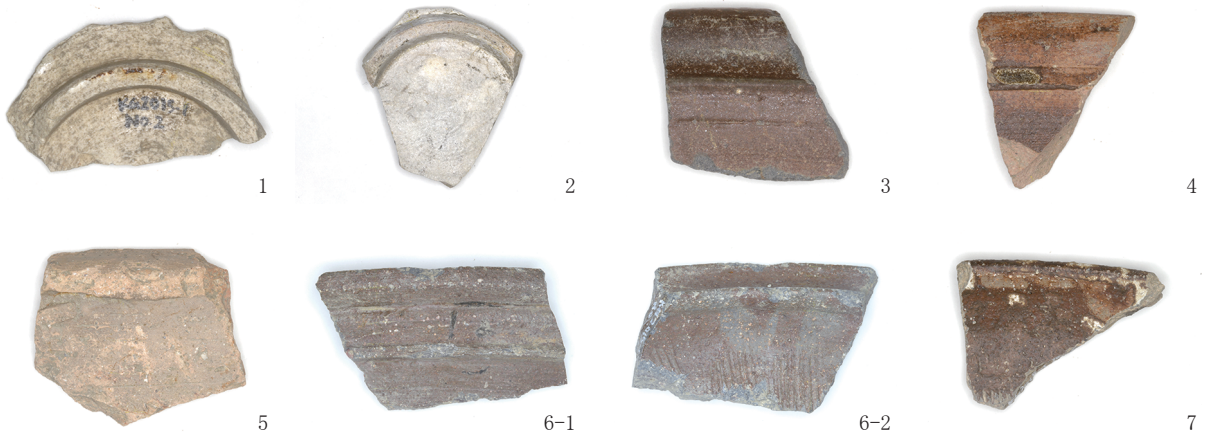


写真 113 出土遺物 (土器)

表 10 出土遺物 (土器) 観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	1層 (旧耕土)	陶胎染付 高台付椀	底部	②(3.9) ③残高0.85	①断面 灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(5Y7/2)	精緻(砂粒をほぼ含まない)	灰釉	
2	2-1層 (旧床土)	陶胎染付 高台付椀	底部	②(4.6) ③残高1.15	①断面 灰白色(2.5Y8/1) ②灰白色(2.5Y8/2)	精緻(砂粒をほぼ含まない)	藁灰釉	
3	1層 (旧耕土)	陶器 鉢	口縁部	③残高2.6	①②褐色(7.5YR4/3) 断面 灰色(5Y5/1)	精緻(砂粒をほぼ含まない)	鉄釉	
4	1層 (旧耕土)	陶器 鉢	口縁部	③残高2.45	①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②明赤褐色(5YR5/6) 断面 にぶい橙色 (7.5YR7/3)	0.5~1mm φの長石含む	鉄釉	
5	1層 (旧耕土)	粗陶器 甕	口縁部	③残高3.15	①②断面 にぶい黄橙色 (10YR7/3)	0.5~1mm φの長石含む		
6	1層 (旧耕土)	陶器 播鉢	口縁部	③残高2.65	①②灰褐色(7.5YR4/2) 断面 褐灰色(7.5YR4/1)	0.5~1mm φの長石含む	肥前	
7	1層 (旧耕土)	陶器 播鉢	口縁部	③残高4.0	①②褐色(7.5YR4/3) 断面 にぶい黄橙色 (10YR7/3)	0.5~1mm φの長石含む	須佐唐津	

世から近世の遺物が混入していることから、中世以降集落が営まれた地域から採土されたものと思われる。また、既往の調査で主として中世の遺物が包含されていた第3層、古墳時代以前の遺物が包含されていた第4・5層に遺物を確認することはできなかった。新保育所の開発域は広大であるが、旧床土より下位の堆積層で遺物の散布が希薄であったことを根拠として、調査は予備発掘にて終了することが平成27年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成27年6月16日開催)に諮られ、承認された。

【註】

1) 小川国治(1992)「第4編近世第3章近世村落の成立と発展」, 宇部市史編集委員会(編)『宇部市史通史篇』上巻, 宇部(山口)